

日本語教師養成講座の教育実習プログラムの構築 —全学連携を目指した取組—

申請区分

本学の教育を高度化するための取組

実施期間

2019年4月1日 ～ 2021年3月31日

実施代表者

関西大学・外国語学部・教授・高梨 信乃

実施分担者

関西大学・文学部・教授・日高 水穂

関西大学・文学部・教授・藤田 高夫

関西大学・外国語学部・教授・アンドリュー・バーク

関西大学・国際部・教授・池田 佳子

関西大学・国際部・准教授・古川 智樹

関西大学・国際部・留学生別科特別常勤講師・竹口 智之

コミュニケーション学院・学院長・奥田 純子

大阪 YMCA 国際専門学校・日本語学科・主任教員・亀田 美保

成果の概要

本取組は、グローバル化が進展し日本語教育の重要性が高まる中、今後の社会的要請に応えるため、より充実し文化庁によって示された新たな基準に合致した日本語教師養成カリキュラムを構築することを目指すものである。

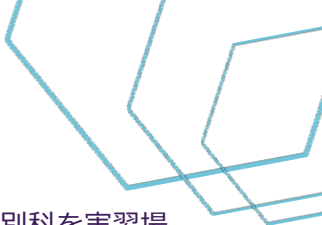
以下、具体的な目的である[1]～[3]に沿い、2019年度の成果を述べる。

[1] 文学部・外国語学部および国際部の日本語教師養成講座担当者間の連携を図る。

従来、個々に「日本語教師養成講座」を設置・運営してきた文学部と外国語学部、加えて学内で留学生を対象とする日本語教育を担う国際部の担当者による会議を2019年度開始当初から頻繁に開催し、連携を強めることができた。会議では、日本語教育人材育成をめぐる議論を活発に行うとともに、[2][3]の実現のための具体的な検討と取組を行った。

[2] 日本語教育実習の受け入れ先を開発する。

文化庁の新たな基準では、日本語教師養成講座の受講生全員が実際の日本語学習者を相手にする教壇実習を行うことが求められている。新基準が適用される2019年度入学生が3年次となる2021年度までに、文学部・外国語学部合わせて約50名の実習先を確保する必要がある。[1]の会議での協議をも



とに、関係部署間の調整を重ねた結果、以下の形で実施することが決定された。①留学生別科を実習場所とする。②文学部・外国語学部の教育実習科目を担当し、教壇実習の準備段階から実施、事後指導までを担う非常勤講師のポストを2020年度から設ける。2020年度は2021年度春学期の開始にむけ、より具体的で詳細な協議・検討を行う。

また、養成講座修了要件となる教育実習に加えて、さらに海外での実習を希望する学生のための新たな実習先として、台湾の世新大学を開拓した。2020年2月に予定していた第1回目の実習は、新型コロナウイルスの影響により中止となったが、2020年度以降の実施も予定されている。

[3] 日本語教師養成講座のカリキュラムを改善する。

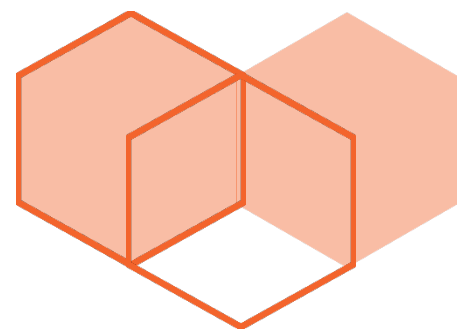
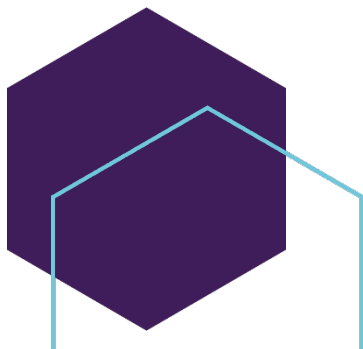
主として次のことを行った。

1) 養成講座修了生のインターンシップ先の開拓

養成講座修了生が海外で日本語教育の経験を積むことができるような仕組みを構築するため、インターンシップ受入れ先として、韓国の日本語学校およびニュージーランドの複数の大学・高校を検討し、各機関の担当者と協議を行った。うち、ニュージーランドのビクトリア大学とは、連携の取組として、2020年度春学期にオンラインによる教育実習を実施する予定である。

2) 養成講座に関連する記録・資料の収集・整理

今後の養成講座運営のために有用な資料として、過去の教育実習授業の録音の文字化、映像の整理などを行った。また、教育実習を中心に日本語教育全般に関わる書籍のリストの作成と、全国の大学の養成講座のカリキュラムについての調査を行った。





実施成果

〔雑誌論文〕 計（ 3 ）件 うち査読付論文 計（ 3 ）件

（著者名、論文標題、雑誌名、巻、発行年、最初と最後のページ、査読の有無）

- 1 高梨 信乃、〈宣言・アナウンス〉の意志表現—書き言葉における「しよう」を中心に、日本語／日本語教育研究、10、2019、101～116、有
- 2 バーク アンドリュー、嶋津 百代、イデオロギーと現実の言語使用の差異に対する意識化—日本語学習者の語用論的能力育成につながる活動—、関西大学外国語学部紀要、21、2019、1～17、有
- 3 Barke, Andrew、Identity Construction of Non-Native Academics in Japanese Universities、Language, Identity and Community、-、2019、17～18、有

〔学会発表〕 計（ 1 ）件 うち招待講演 計（ 0 ）件

（発表者名、発表標題、学会等名、発表年月日、発表場所）

- 1 高梨信乃、前田直子、高橋美奈子、多文化社会における表現リテラシーを考える—学習者の日本語をどこまで許容するか—、カナダ日本語教育振興会(CAJLE) 年次大会 2019、2019年8月7日、ビクトリア大学（カナダ）

〔図 書〕 計（ 0 ）件

（著者名、書名、出版社、発行年、総ページ数）

〔出 願〕 計（ 0 ）件

（発明者、権利者、産業財産権の名称、産業財産権の種類、番号、出願年月日、国内・外国の別）

〔取 得〕 計（ 0 ）件

（発明者、権利者、産業財産権の名称、産業財産権の種類、番号、出願年月日、国内・外国の別）



林原美術館所蔵資料の総合的調査—林原美術館との 連携強化のために—

申請区分

本学の地域研究・地域連携を促進するための取組

実施期間

2019年4月1日 ～ 2022年3月31日

実施代表者

関西大学・文学部・教授・乾 善彦

実施分担者

関西大学・文学部・教授・小倉 宗

関西大学・文学部・教授・加藤 洋介

関西大学・文学部・教授・岸本 理恵

関西大学・文学部・教授・田中 登

関西大学・文学部・教授・平井 章一

関西大学・文学部・教授・村田 右富実

関西大学・文学部・教授・山本 卓

関西大学・名誉教授・山本 登朗

林原美術館・主任学芸員・植野 哲也

林原美術館・主任学芸員・橋本 龍

林原美術館・学芸員・槌田 祐枝

成果の概要

本研究の計画は以下の①～④であった。それぞれについて、三年間の成果をまとめて報告する。

①林原美術館所蔵の岡山藩池田家の資料の悉皆調査（担当：関係者全員）

調査には、国文学研究資料館の調査カード（Sカード）を使用して、1点、1点について、詳細な項目をデータ化することを目的とした。本研究の前年度につけた教育研究緊急支援経費による調査と合わせて、調査カードは3138件に達した。

②資料の目録作成とデジタル化（担当：山本（卓）、小倉、村田、平井、福留研究協力者）

池田家蔵書の目録を作成するために、既存の簡易目録（林原美術館蔵白アルバム）と今回作成した調査カードを合わせてデジタル化するために、情報処理関係者と相談しながら、その制度設計をおこない、それに従って調査カード3138枚の全項目と林原美術館所蔵の白アルバムの情報項目とあわせた、のべ5208レコードの目録データベース作成した。公開日時は、現在、林原美術館と調整中。

また、調査した資料のうちとくに重要なものについては、撮影してデジタル化し、公開に備えた。撮影した資料は、280点以上、約6,000コマにのぼる。また、新型コロナウイルスの影響で直接撮影できない状況が続き、業者による委託撮影もおこなっている（30点、約800コマ）。これらは、研究者に公



開され、活用できるようになる予定である。

※以上、①②の意義

林原美術館蔵岡山藩池田家資料は、その存在は知られながらも、実体は明らかにされていなかった。今回の調査は、膨大な資料のまだ3分の1程度にすぎないが、3138件に及ぶ資料の詳細な調査によって、岡山藩歴代藩主の日常的な文事が明らかになった。その資料を提供することは、歴史・文学・芸術分野にわたる研究に資するところが極めて大きい。

③成果の公開と地域への貢献（担当：橋本、植野、槌田、岸本、山本（登）、福留・中尾研究協力者）

林原美術館では、本調査に関連した企画展示をおこない、会期中に公開講演等の催しもおこなった。企画展：「愛も出世もあだ討も 絵が紡ぐオムニバスストーリー 飛び込め！お話の世界」（2020.7.4～9.6）、「博学多才—池田宗政の学びとその生涯—」（2020.9.19～11.23）、「匠の技・百花繚乱—細部に宿る日本の美—」（2021.2.13～3.28）、「遊びの文化—和歌・蹴鞠・楽器のたしなみ—」（2022.1.27～3.31）公開講座：「池田綱政の文事—艶書合の世界—」（山本登朗、2020.10.18）、「池田綱政の和歌交流—広島藩・浅野綱晟の場合—」（福留、2021.3.14）、「池田綱政が記した旅日記」（中尾、2021.9.5）

学術シンポジウム：「綱政公の文事・芸事」（2022.3.12）担当：乾、山本（登）、福留、中尾、北井、岸本

※以上、③は主として、岡山における研究成果の公表であるが、岡山周辺の人々だけでなく、全国各地から来場者があり、これによって関西大学と林原美術館との提携の実体を多くの人々に発信できたと考えている。また、シンポジウムには専門の研究者も多く参加してくれており、社会貢献だけでなく、研究面でも大きな成果が得られた。

④研究成果の発信

1, 2021年度関西大学博物館冬季企画展「池田家藩主三代の手蹟」（2021.12.10～2022.1.19）

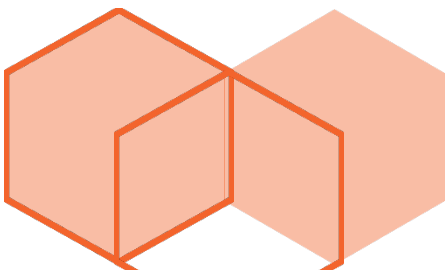
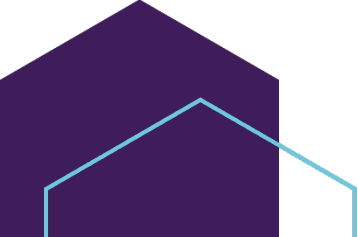
当初の計画には記載していないが、新型コロナウイルスの影響で悉皆調査の機会が著しく制限されたため、本学博物館における林原美術館蔵品の展示を企画した。これは、関西大学における研究成果発信のための大きな成果だと考えている。（担当：平井・乾・橋本・植野・槌田）

2, 『林原美術館蔵岡山藩池田家書籍資料解題（選）』の刊行（2022.3）（乾監修・福留編集、執筆6名）

3, 研究協力者の論文：福留瑞美「備前岡山藩池田綱政の和歌修練②」（国文学106、2022.3）ほか、1件、葉芳子「池田光政筆「古筆臨模聚成」所収の『源氏物語』本文の古筆切」（国文学104、2020.3）

4, 研究協力者の口頭発表：北井裕美子「池田綱政の妻千子の文筆資料」（東西学術研究所研究例会、2020.2）、福留瑞美「池田綱政の詠草から見る飛鳥井雅章の和歌指導」（和歌文学会関西七月例会、2021.7.3）ほか3件

※1の展覧は、未紹介資料が中心で、社会貢献面で関西大学周辺の人々に林原美術館との提携を強くアピールする一方、展示品は調査の研究成果であり、研究成果の発信面でも大きな意義があった。2～4では、教育面で、研究協力者の若手研究者の育成に効果があったことが重要であり、研究に協力してくれた学生、卒業生の今後の研究の進展が期待できる。



実施成果

〔雑誌論文〕 計（ 3 ）件 うち査読付論文 計（ 3 ）件

（著者名、論文標題、雑誌名、巻、発行年、最初と最後のページ、査読の有無）

- 1 山本登朗,田中登,山本卓,乾善彦,植野哲也,中尾和昇,橋本龍「関西大学による林原美術館蔵池田家伝来資料の調査と研究—報告と中間総括—」(国文学 104、335-342 頁、2020.3) 査読有
- 2 乾善彦「林原美術館蔵『池田光政公御筆古筆写巻物』所収「万葉集切・綾地切」(萬葉 229、43-51 頁、2020.3) 査読有
- 3 山本登朗「「幻の伊勢物語屏風—林原美術館蔵「池田綱政筆伊勢物語屏風メクリ四十二枚」をめぐって—」(国文学 104、201-209 頁、2020.3) 査読有

〔学会発表〕 計（ 0 ）件 うち招待講演 計（ 0 ）件

（発表者名、発表標題、学会等名、発表年月日、発表場所）

〔図 書〕 計（ 1 ）件

（著者名、書名、出版社、発行年、総ページ数）

- 1 乾善彦『林原美術館蔵岡山藩池田家書籍資料解題（選）』私家版、2022年3月、総頁数 50 頁

〔出 願〕 計（ 0 ）件

（発明者、権利者、産業財産権の名称、産業財産権の種類、番号、出願年月日、国内・外国の別）

〔取 得〕 計（ 0 ）件

（発明者、権利者、産業財産権の名称、産業財産権の種類、番号、出願年月日、国内・外国の別）

微弱電流によるサンゴの成長促進メカニズムの解明とサンゴ群集再生技術の開発

申請区分

本学の地域研究・地域連携を促進するための取組

実施期間

2019年4月1日 ～ 2021年3月31日

実施代表者

関西大学・化学生命工学部・教授・上田 正人

実施分担者

関西大学・社会安全学部・教授・高橋 智幸

関西大学・システム理工学部・教授・米津 大吾

関西大学・環境都市工学部・教授・鶴田 浩章

秋田大学・大学院 理工学研究科・教授・徳重 英信

成果の概要

微弱電流通電によるサンゴの定着・成長促進のメカニズムを解明すると共に、サンゴ育成用モルタル基盤（以下、モルタル基盤）および微弱電流供給技術を開発して、実際のサンゴ礁海域での実地実験によりその性能を検証することを目的とした。また、その過程で関連地域との連携をとりながら、サンゴ礁再生技術の研究・開発のみならず、サンゴ礁の減少問題やその対策に関する教育や支援事業のサポートを試みた。

1)微弱電流発生装置の開発（高橋，上田）

圧電フィルム，アルミホイルから構成される発電部の形状を板状から円柱状に変更することにより，あらゆる方向の潮流に応答できるようになった。

2)モルタル基盤の開発とサンゴの定着・成長の評価（鶴田，徳重）

フライアッシュ（石炭火力発電所排出の石炭灰），シリカフューム，酸化チタンを添加したモルタル基盤を作製し，一部の試料は表面を炭酸化した。試料にサンゴ片を固定し，与論島ウドノスピーチ沖に設置した。シリカフュームを添加し，表面を炭酸化した試料，ならびに酸化チタンを添加した試料でサンゴ片の成長量が大きくなる傾向が認められた。

3)サンゴの骨格形成とヒトの骨形成におけるアナロジーの体系化（上田）

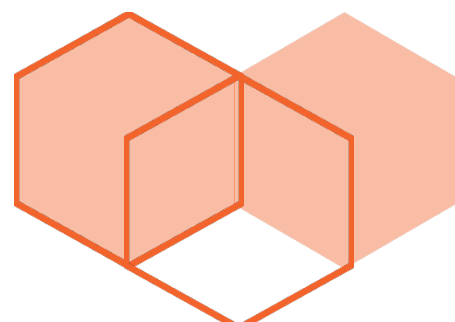
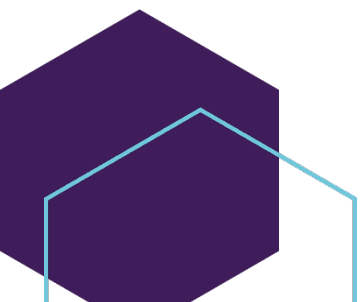
QCM法を利用し，プラヌラ幼生が酸化チタン表面に密着する過程をその場測定した。海水中のタンパク質の吸着，ならびにプラヌラ幼生の基盤密着に観察され，それは脊椎動物の細胞が示す同じ傾向を捉えることができた。

4)サンゴ断片の基盤定着・成長促進に及ぼす微弱電流通電の効果（高橋，鶴田，徳重，米津，上田）

純チタン基盤にサンゴ片を固定し、1)の発電デバイスを結線した状態で和歌山県の串本町沿岸に設置している。現在、経過観察中である。

5)アウトリーチ活動（高橋，鶴田，徳重，上田）

鹿児島県の与論島にて小学生を対象としたサンゴ教室を開催した。その様子は、南海日日新聞にも掲載された（2019/12/15）。与論町教育委員会の海洋教育に関するプログラムにおいて、引き続きサンゴ教室開催の要請を受けている。



実施成果

〔雑誌論文〕 計（ 2 ）件 うち査読付論文 計（ 1 ）件

（著者名、論文標題、雑誌名、巻、発行年、最初と最後のページ、査読の有無）

- 1 M. Ueda, C. Saruwatari, M. Ikeda, T. Takahashi, H. Tsuruta, H. Tokushige, H. Hikosaka, D. Yonetsu; Cell printers and coral reef regeneration, IMPACT, May, 2020, 54-56. [査読なし]
- 2 M. Ueda, C. Sawatari, T. Takahashi, H. Tsuruta, H. Tokushige, H. Hikosaka, D. Yonetsu, M. Ikeda, Utilisation of Titanium and Titanium Dioxide as Scaffolds for Proliferating Coral Reef, Mater. Sci. Forum, 1016, 2020, 1497-1502. [査読あり]

〔学会発表〕 計（ 8 ）件 うち招待講演 計（ 3 ）件

（発表者名、発表標題、学会等名、発表年月日、発表場所）

- 1 猿渡ちひろ, 上田正人, 池田勝彦, 骨形成促進技術を利用したサンゴ礁の再生, 日本バイオマテリアル学会関西ブロック第 14 回若手研究発表会, 2019.9.5, 国立循環器病研究センター.
- 2 猿渡ちひろ, 上田正人, 池田勝彦, QCM と μ CT を利用したサンゴと再生足場の界面解析, 日本サンゴ礁学会第 22 回大会, 2019.11.9, 北海道大学.
- 3 猿渡ちひろ, 上田正人, 池田勝彦, μ CT と QCM によるサンゴと再生基盤の界面解析, 第 2 回 日本金属学会 第 7 分野講演会, 2019.12.8, 神戸国際会議場. 【最優秀ポスター賞】
- 4 猿渡ちひろ, 上田正人, 池田勝彦, サンゴとチタン基再生足場の界面解析の試み, 日本金属学会 2020 年春期 (第 166 回) 講演大会, 2020.3.3, Web 公開.
- 5 M. Ueda, Utilisation of Ceramic films in Biomedical and Environmental Applications, The 15th International Workshop on Biomaterials in Interface Science, 14Dec2020, Zoom. 【招待講演】
- 6 上坂菜々子, 上田正人, 池田勝彦, 石橋菜々, 内山七海, 猿渡ちひろ, チタン基足場におけるポリプの接着特性, 日本金属学会 2021 年春期 (第 168 回) 講演大会, 2021/3/16, Zoom.
- 7 上田正人, 再生医療技術を利用したサンゴの増殖, 超異分野学会 大阪大会 2021, 2021/4/24, 丸善インテックアリーナ大阪. 【招待講演】
- 8 M. Ueda, C. Sawatari, T. Takahashi, H. Tsuruta, H. Tokushige, H. Hikosaka, D. Yonetsu, M. Ikeda, Utilisation of Titanium and Titanium Dioxide as Scaffolds for Proliferating Coral Reef, Mater., 10-14 May2021, Web 開催 (動画収録済み). 【招待講演】

〔図 書〕 計（ 0 ）件

（著者名、書名、出版社、発行年、総ページ数）

〔出 願〕 計（ 0 ）件

（発明者、権利者、産業財産権の名称、産業財産権の種類、番号、出願年月日、国内・外国の別）

〔取 得〕 計（ 0 ）件

（発明者、権利者、産業財産権の名称、産業財産権の種類、番号、出願年月日、国内・外国の別）

堺市・田辺市との地域連携を基盤とした新たな環境教育プログラムの開発

申請区分

本学の地域研究・地域連携を促進するための取組

実施期間

2019年4月1日～2021年3月31日

実施代表者

関西大学・人間健康学部・教授・村川 治彦

実施分担者

関西大学・人間健康学部・教授・森 仁志

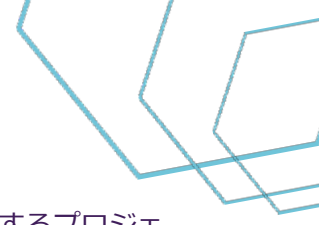
関西大学・人間健康学部・教授・安田 忠典

成果の概要

2019年度から2年間にわたり助成を受けた本研究課題では、国連が推奨するSDGsと日本政府が推進する地方創生を統合的に実現する試みとして、関大型体験学習プログラムでトレーニングを受けた学生たちが、世界遺産である熊野の自然や宗教的伝統のなかで日々を暮らす田辺市本宮地区の地域住民や行政と協力し、堺市の子供や市民、あるいは熊野を訪れる家族や外国人観光客などに提供できる環境教育のためのプログラム整備を達成目標とした。2019年度は、①田辺市本宮町の農業体験施設「熊野出会いの里」などを活用した家族向け農業体験プログラム。②「関西大学の森」を整備し、アドベンチャープログラムを活用した自然体験プログラム。③世界遺産である熊野の自然や宗教文化に根ざした生活の知恵から持続可能な社会のあり方を学ぶ環境教育プログラム。の3つのプログラム開発を進め、2020年度はこれらを実際に試行的に提供し、PDCAを回していくことを目指した。

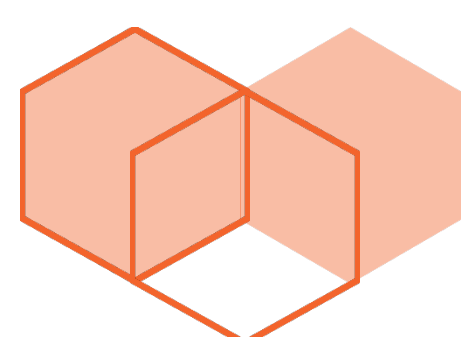
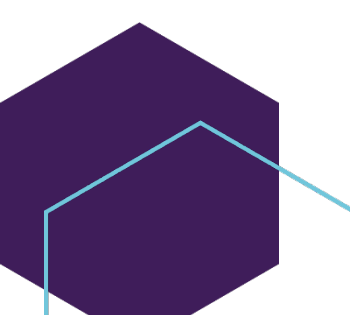
しかし、新型コロナウイルス感染拡大のため、2020年度は本宮町への移動が制約され、またプログラムの対象者とした本宮町への観光客が激減し、当初の計画を大きく変更せざるを得なかった。そのなかで、2020年7月に一時感染拡大が収束しGoToキャンペーンが再開されたタイミングで本宮地域での家族向けプログラムの準備に取りかかったが、予定していた8月末に再度感染が拡大し直前で中止とせざるを得なかった。また第2波が落ち着いた10月から再度秋の観光シーズンに向けてプログラム提供を試みたが、これも11月に入っての感染拡大によりやむなく中止となった。(ホームページ<https://wps.itc.kansai-u.ac.jp/Kusdgs>・添付資料参照)

そこで、この課題で行ってきた本宮町の観光と連携した「環境教育プログラム」の開発と並行して、新型コロナウイルス感染が拡大するなかで堺市でも実施可能な「環境教育プログラム」の開発に着手した。具体的には、2019年3月に設置された「関西大学SDGsラーニングラボ (KU Laboratory for SDGs Learning)」と連携し、SDGsが掲げる持続可能な社会の実現にむけて食と農を通してのESD(持続可能な開発のための教育)に取り組むプログラムとして、「エディブル・スクールヤード (Edible



Schoolyard : 食べられる校庭)」を取り入れた環境教育プログラムを堺キャンパスで提供するプロジェクトを進める準備を 2020 年 8 月から進めた。「エディブル・スクールヤード」は、堺市の海外姉妹都市である米国カリフォルニア州バークレー市のマーチン・ルーサー・キング・ジュニア中学校で 1995 年に始まった食育プログラムで、現在全世界 75 カ国、5681 カ所で実践されている。この課題で目標としてきた①田辺市本宮町の農業体験施設「熊野出合いの里」などを活用した家族向け農業体験プログラムの開発で培った経験を活かし、「エディブル・スクールヤード」を堺市の食育推進事業や、堺市と関西大学の地域連携プログラムで実施している子ども食堂、新しい遊びの場などとも連携させ、堺市全域の小中学校に広げ、独自のSDGsの教育プログラムとして提供することを新たな目標とした。そのために、2020 年度 1 月に「エディブル・スクールヤード」を日本に紹介し普及に努めている「エディブル・スクールヤードジャパン」の堀口代表、西村共同代表らとの協力関係を結び、また堺市と関西大学の地域連携協議会で学生たちがプレゼンテーションを行った。現在、2021 年度 ニッセイ財団 児童・少年の健全育成：実践的研究助成「子どもを巡る真のウェルビーイングの探求」に助成を申請しており、この助成が採択されれば、「エディブル・スクールヤード堺」の実施に向けて本格的に活動を進めていく。

また研究代表者、分担者が編集責任者となり、本課題の基盤となった 2013 年度教育研究高度化促進費「プロジェクトアドベンチャーを基盤にした体験教育型研修プログラム開発」から今回の課題の成果までをまとめ、「実践知から生き方の探求へー関大型体験学習プログラム(K-ELP)に基づく新たなSDGs教育（仮題）」として出版する準備を進めている。





実施成果

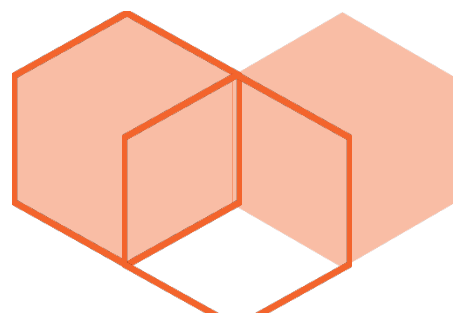
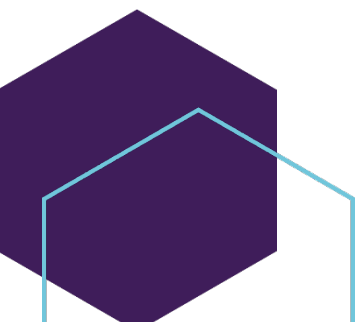
〔雑誌論文〕 計（ 0 ）件 うち査読付論文 計（ 0 ）件
（著者名、論文標題、雑誌名、巻、発行年、最初と最後のページ、査読の有無）

〔学会発表〕 計（ 0 ）件 うち招待講演 計（ 0 ）件
（発表者名、発表標題、学会等名、発表年月日、発表場所）

〔図 書〕 計（ 0 ）件
（著者名、書名、出版社、発行年、総ページ数）

〔出 願〕 計（ 0 ）件
（発明者、権利者、産業財産権の名称、産業財産権の種類、番号、出願年月日、国内・外国の別）

〔取 得〕 計（ 0 ）件
（発明者、権利者、産業財産権の名称、産業財産権の種類、番号、出願年月日、国内・外国の別）



医療ビッグデータ分析を通じた特定健診の効果測定および機密性の高い行政データ分析拠点の形成

申請区分

革新的なイノベーション創生を目指した取組

実施期間

2019年4月1日 ～ 2022年3月31日

実施代表者

関西大学・経済学部・教授・本西 泰三

実施分担者

関西大学・経済学部・教授・小林 創

関西大学・経済学部・准教授・松田 絢子

関西大学・商学部・教授・宮崎 慧

拓殖大学・政経学部・教授・大山 昌子

国立循環器病研究センター予防医学・疫学情報部・上級研究員・中尾 葉子

成果の概要


この取組の目的は、国が保有する特定健診に関する医療ビッグデータ（レセプト情報・特定健診等情報データベース NDB）の分析を通じて、特定健診の効果を明らかにし、学内に行政ビッグデータ分析拠点を設ける基盤を作ることにある。

本研究グループでの利用を予定していた NDB（レセプト情報・特定健診等情報データベース）の利用許可は2019年10月2日に承諾された（「医療ビッグデータ分析による特定健診・特定保健指導の効果測定」厚生労働省発保1002第1号）が、その後のデータ提供が、当初公表されていたスケジュールに比べて大幅に遅れ、2020年7月25日となった。

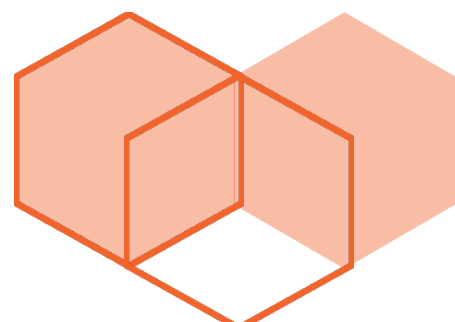
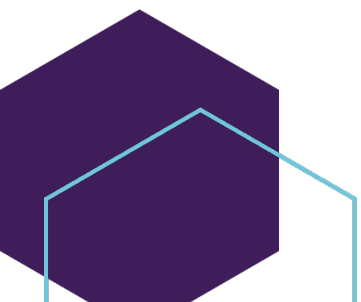
2020年度中は、宮崎が中心となってデータの複製・セットアップ・確認およびクリーニングを行った。これには約3か月程度の期間を要した。その後は小林と本西が、入手したビッグデータを分析するのに最も適した環境の検討と構築を行った。またこの間、中尾は医学の専門家としての助言を行った。

2021年度に入って分析が本格化し、中尾による論文化の構想の下、本西が中心となってデータ分析を進めた。松田は図表の作成などで支援を行った。NDBが極めて秘匿性の高いデータベースであるため、これを用いた分析結果の公表にあたっては、事前確認を受けることが義務付けられている。2021年度中は4月と9月の2回にわたって厚生労働省に分析結果の公表確認を行い、これが認められた。分析の途中経過と概要については、2021年6月30日に関西大学 RISS ワークショップにおいて「日本の特定健診は有効か？」と題して、本西が報告を行った。

上記分析によって、特定保健指導が人々の健康状態や保健行動に与える影響を、極めて厳密な手法を用いて正確に推定することができた。



2022年度には4月に3回目の公表確認を行い、厚生労働省によりこれが認められた。これにより、さらに上記の結果を補強する分析結果が追加された。現在は、こうした結果を論文に取りまとめ、学術誌に投稿する準備を、研究代表者・分担者全員の相談と協力のもとに進めている。





実施成果

〔雑誌論文〕 計（ 0 ）件 うち査読付論文 計（ 0 ）件
（著者名、論文標題、雑誌名、巻、発行年、最初と最後のページ、査読の有無）

〔学会発表〕 計（ 0 ）件 うち招待講演 計（ 0 ）件
（発表者名、発表標題、学会等名、発表年月日、発表場所）

〔図 書〕 計（ 0 ）件
（著者名、書名、出版社、発行年、総ページ数）

〔出 願〕 計（ 0 ）件
（発明者、権利者、産業財産権の名称、産業財産権の種類、番号、出願年月日、国内・外国の別）

〔取 得〕 計（ 0 ）件
（発明者、権利者、産業財産権の名称、産業財産権の種類、番号、出願年月日、国内・外国の別）

